

幼児と大人が表情図を感情推測した際の 強度に対する発話研究

—大きさと感情を中心として—

戸 田 大 樹

1. 問題と目的

近年、日本における教育問題として、子ども達の自己肯定感や思いやりなどの非認知的能力の低下が著しく、幼児に対する感情教育の重要性が重要視されている。幼児の感情に関する研究には、澤田(1997)による幼児の他者の見かけの感情の理解の発達に関する研究や戸田(2003)による幼児の他者感情理解における向社会的行動との関係に関する研究、久保(1968)による幼児における入り混じった感情の理解に関する実証的研究などがある。また、幼児の共感性に関する研究も様々行われているが、この共感性も感情を主とした重要な概念である。

ここでの感情とは、辰野ほか編(1995)によれば、快、不快など、外界の刺激によって引き起こされ、体験された心の状態であり、情動(emotion)と気分(mood)の両者を含む概念であるとされている。また、伊藤(2001)によると、情動は喜びや怒りなど、何らかの特定の対象が原因となって生じる、かなり強い感情状態で、一過性の生理的興奮や表出行動を伴うことが多い。それに対して、気分は、なんとなく楽しいとか悲しいといった、明確な対象がなく生じる、比較的弱い気分状態で、一定の持続時間を持つと述べている。さらに、西元(2001)によれば共感(empathy)とは「他者が何か感情を見せている場面に出会った時や、他者がどのような気持ちなのかを想像するとき、自分のことではないのに相手と同じような気持ちになること、すなわち、他者の気持ちをあたかも自分自身の気持ちのように感じることであり」と定義している。これに加え、Eisenberg and Miller(1987)によると、共感には他者が悲しくて泣いているのに対して、それにつられて自分も悲しくなるといった「情動的感染」、他者と同等の感情を感じるといった「同情」、他者の抱いている感情に煩わしさを感じる「個人的苦

痛」という3タイプがあると述べてられている。渡辺・瀧口(1986)においては、これらの共感性は認知能力の側面と情緒的側面の二つの側面があり、認知的側面は「ある状況において、他人の思考、感情、行為の中に自分において他人の反応を予測する能力」であり、情動的側面は「他人の情動を経験する結果、他人と同じ情動を経験すること」と定義している。

このように、感情や共感性についての定義は様々であるが、今までに幼児を調査対象とした感情や共感性に関する研究に関して、第1の問題点は、未だ現在においても共感性の定義が確立されていないことである(有馬 1993; 森下 1990)。そこで、本研究では社会的認知能力として知られる視点取得能力に注目することにした。樟本(1999)によると、視点取得能力は共感性の先行条件であり、共感性は認知的側面と情動的側面の両側面を包括しているが、視点取得はその共感性の認知的側面に相当すると述べている。また、「他者の視点に立てること」が視点取得の基本的意味であり、「他者が何を見ているか」という知覚的視点取得(perceptual perspective-taking)、「他者が何を考えているか」という社会的視点取得(social perspective-taking)、「他者が何を感じているか」という感情的視点取得(affective perspective-taking)(感情の共有の意味も含まれる)の3つに分類され、他者のおかれた状況や立場にたって、他者の感情や意図を推測する力である。さらに、子安(1995)によれば、視点取得とは「ものごとを他の人の視点から見た場合にどのように見えるかが理解できること」を意味すると述べている。よって、本研究では、より感情推測について詳細に定義されている感情的視点取得の意味をこの感情推測に包括したものとする(以下、感情推測とする)。

第2の問題点は、阪本ほか(1969)が幼児の発言が実際何を意味しているのか疑わしいと述べているように、幼児の言語能力が未発達であるため、自分と他者との感情を区別できているかが明確でないことである。5歳児(以下、幼児とする)は視点取得可能な年齢であり、自分と他者との感情を区別できるため、本研究の研究対象とする。第3の問題点は、感情や共感性の測定方法を幼児の発話分析のみに限定していることである。幼児の言語能力は未発達であるため、幼児の感情や共感性を言語的側面のみに限定して測定することは困難である。よって、発話分析のみでは幼児の感情推測の信頼性は保証できないことから、有馬(1993)の度合いカード(選択法)に対する幼児の感情推測における反応強度と言語報告から、本

研究の信頼性を保証することとした。この度合いカードは、幼児の言語能力が未発達であり評定法を用いることが困難な場合に使用される。また、大中小の順に円が記載されており、幼児が他者感情を推測した場合、その際の発話が対象に対して共感している立場か否かを測定するための補足的カード（3件法）である。これについて有馬（1993）は、幼児の曖昧な言語反応の場合のみ用いるのではなく、積極的に利用の仕方をするのでより詳細な発話分析が可能になると述べている。第4の問題点は、感情や共感性の調査は幼児への刺激要因が多いため、幼児の「何」を測定しているかが曖昧なことである（樟本 1999）。一般的に、視点取得は荒木（1987）の役割取得検査によるジレンマ課題や絵画物語法（picture/story assessment）によって、幼児の発話を分析することで測定されている。具体的には、ジレンマ課題や絵画物語法は短い物語を幼児に聞かせ、調査対象児が主人公と類似した情動を報告すれば、その調査対象児は共感的に反応したと見なされるのである（浜崎 1991）。しかし、いずれも物語を幼児に読み聞かせるという方法をとることから、幼児には調査者の声や物語の内容など様々な刺激が与えられる。そのため、幼児がどの刺激に反応をしたのが明確でないという問題がある。

上記4点の問題点を踏まえ、本研究では可能な限り幼児に対する刺激要因を単一のものとするため、幼児に物語を読み聞かせる方法は用いず、幼児に表情図のみを呈示することとする。そして、幼児が表情図を感情推測した際の強度を測定することとした。主な表情研究では、星野（1969）は幼児の表情認知や情動認知に焦点を当て、幼児の表情理解力に関する性差や年齢差を明らかにしている。また、櫻庭・今泉（2001）は幼児が他者の感情を推測する場合、他者の表情を手掛かりにすると述べている。さらに、今井・桶本（1973）は幼児に提示する表情は、実験条件の統制のしやすさという理由から線画の表情図を用いていることの利点を述べている。

このように、幼児を対象として表情に限定した部分的な研究は数多くあるが、表情の要因は幼児教育・保育で頻繁に使用される絵本の登場人物として密接な関係性がある。阪本ほか（1969）は幼児が好む本を実証的に証明するため、余白の有無や色彩の多少、背景の有無など実に11もの部分的な研究がなされている。絵本を細かい条件に絞り込んで分析することは、絵本研究を進めるうえでの基礎データとなるが大きさに着目した研究は少ない。この大きさに着目した研究として、堀田ほか（1999）による画

像に写す表情の大きさを変化させた場合の影響に関する研究がある。しかし、これは大人を対象としており、幼児を対象とした場合には追研究として困難である。大きさと感情に着目した研究としては、戸田 (2013) による絵本に関する基礎的研究があり、幼児の感情推測強度に与える大きさと感情の影響に関し、大きさと感情ともに幼児に影響があることを報告している。一方で、大人に対しては感情ではなく大きさのみが影響を及ぼすことを報告している。しかし、戸田 (2013) の研究では、幼児と大人が表情図を感情推測した際の理由を明確にしていない。幼児と大人に与える刺激要因によってその理由には差異があると考えられるため、本研究では幼児の発話と大人自由記述の内容に着目する。

以上を踏まえ、本研究は、幼児と大人が大きさの異なる喜びと悲しみの表情図を感情推測した際の強度に対する発話について、度合いカードを使用して検討することを目的とする。そして、今後の幼児教育・保育における感情教育に活用するため、前段階である絵本作成における基礎的資料を得ることを目的とした研究であると位置づけられる。

2. 調査 1

2.1 目的

表情図の大きさ (大・小) に対する幼児と大人の感情推測強度における度合い得点選択理由を明らかにすることを目的とする。

2.2 方法

調査計画は、感情 (2 水準：喜・悲) × 大きさ (2 水準：大・小) の 4 水準の差を調べる、2 要因の被験者間計画である。

調査参加児：東京都内公立幼稚園年長児 80 名 (男児 36 名、女児 44 名) である。調査参加児を①喜・小条件②喜・大条件③悲・小条件④悲・大条件の 4 条件に割り当てた。各群の人数はいずれも 20 名 (男児 9 名、女児 11 名) である。調査者は 1 名であり、個別面接法の形をとり調査時間は一人 6 分程度である。なお、調査参加児に対してはあらかじめ新版 K 式発達検査の表情図版 II を用いて、基本的な表情理解ができていないか検討済 (平均 3.95) である。また、幼児の度合い得点選択理由を言

語面から検討するため、幼児の発話は全てICレコーダーに録音した。

調査参加者：東京都内私立大学の大学生80名（男性24、女性56名）である。調査参加者を①喜・小条件②喜・大条件③悲・小条件④悲・大条件の4条件に割り当てた。各群の人数はいずれも各20名（男性6名、女性14名）である。

2.3 材料

①表情図カード：表情図の大きさが幼児の感情推測強度に与える影響を調べる目的で作成した。表情図カードは19×27cmの画用紙に喜びと悲しみの2種類の表情図大（半径9cm）と2種類の表情図小（半径4.5cm）を描いた。本研究において測定する感情は幼児の喜びと悲しみの2感情に限定し、表情は線画で表した。また、表情図は漫画風に線画であらわし、表情構成部分は眉、目、口の3部分に限定した。表情図作成の条件の決定理由は、以下の通りである。

喜びと悲しみの2感情に限定したのは、星野（1969）が3歳児はすでに喜怒哀楽という表情の感情的意味を理解していることを明らかにしているからである。また、表情カードを作成するにあたって、幼児の表情認知の適中率を低下させないためには表情は基本的な表情に限定して単純な条件にすることが望ましいこと、幼児に好まれる表情の順序は喜び、悲しみ、怒りであることを報告しているからである。さらに、浜崎（1985）によると幼児は怒りと恐れの見別が困難であると述べていること、今井・桶本（1973）によると幼児は悲しみと怒りの情動認知において明確に区分しえない複雑な側面があり、幼児は悲しみと怒りの感情を混同してしまう等の傾向があるからである。これに加え、星野（1969）は用いる表情は線画にすることで被験者の性別や年齢に影響をさほど与えないこと、表情にあらわす感情を特徴的に表現できることの利点を挙げているため、表情図は線画にした。

②度合いカード：カードはA3用紙に小から大の円を黒色で描いた。円の半径はそれぞれ1cm、2cm、3cm、4cm、5cmである。

2.4 手続き

幼稚園の一室を借り、そこで、個別に面接を行った。また、調査者は調

査を行う前に、幼児が緊張せず課題に取り組めるように幼児と2分間程度お話をしてラポールの形成に努めた。そして、調査者は被験児と対面して「今から〇〇くん、〇〇ちゃんにかずきくん(かずこちゃん)の顔の絵を見せてからクイズをするからよく聞いていてね」と性差を考慮して男児・女児に合わせた教示をして表情図カードを幼児に呈示した。次に「この顔どんな気持ちかな」と質問し、幼児が解答したらその理由を尋ねた。そして、度合いカードを幼児に呈示して「〇〇くん(〇〇ちゃん)さ、今、かずきくん(かずこちゃん)の気持ちを教えてくれたよね。その気持ちはたくさん嬉しい(悲しい)気持ちかな、ちょっと嬉しい(悲しい)気持ちかな、どれくらいの気持ちかな」と円を指差しながら質問して、度合いカードを指差しで選択してもらった。最後に、幼児の回答に対して「何でそう思ったかお兄さんに教えてくれるかな」と質問した。採点方法は幼児の未発達な言語能力を考慮すると評定法を用いることは困難であることから、円形イメージを用いて感情推測の強度を測定する度合いカードを用いた。この度合いカードは、幼児の感情推測強弱の程度を測る目的で使用した。度合いカードの大円を選択した場合は5点であり、小円にむけて順に4点、3点、2点、1点である。どれも選択しなければ0点とした。

また、大学の講師に調査の協力を依頼し、大学生80名を対象に質問紙の配布・回収を実施した(回収率100%)。記録方法については、質問紙に調査対象者本人によって記述してもらった。採点方法は幼児と同様、度合いカードである。度合いカードの大円を選択した場合は5点であり、小円にむけて順に4点、3点、2点、1点である。どれも選択しなければ0点とした。また、大学生が度合いカードを選択した要因について分析するため、選択理由を自由記述してもらった。

2.5 結果

2.5.1 幼児と大人が表情図を感情推測した際の強度に対する発話について

幼児の感情推測の強度における4群の度合い得点に関して平均と標準偏差を算出した(表1)。次に、調査で得られた内省報告{大きさが異なる表情図(顔・喜悲)を幼児が感情推測した際の度合い得点理由}を{感情(顔・喜悲)}、{大きさ(大・小)}、{表情構成部分(目・眉毛・口)}、[無回答]、「その他」、の5カテゴリーに分類した。また、「無回答」の度合い得点理由を除いた度合い得点理由の比率に χ^2 検定を行うことで度合い得

表1 表情図を幼児が感情推測した際の度合い得点に関する平均(標準偏差)

群	大きさ大条件	大きさ小条件
喜び表情群	$n = 20$ 4.90 (0.31)	$n = 20$ 4.15 (0.99)
悲しみ表情群	$n = 20$ 4.40 (0.82)	$n = 20$ 3.80 (0.95)

表2 喜び表情図(大)に対する幼児の度合い得点の選択理由($N = 20$)

度合い得点選択理由比較	F 値
感情(顔・喜) = 大きさ(大)	1.74
感情(顔・喜) = 表情構成部分	1.42
感情(顔・喜) > その他	4.80*
大きさ(大) > 表情構成部分	3.24**
大きさ(大) > その他	6.17**
表情構成部分 > その他	3.61**

** $p < .05$, *** $p < .01$

点理由の比較をした。

第1に、幼児の表情図の感情(顔・喜)と大きさ(大)に対する感情推測後の度合い得点理由比率における χ^2 検定の結果、有意差が認められた($\chi^2(3) = 42.50, p < .01$)。残差分析の結果(表2)、感情(顔・喜)は大きさ(大)と表情構成部分との関係において有意差は認められなかったが、「その他」との関係に有意差が認められた($p < .05$)。また、大きさ(大)は表情構成部分と「その他」との関係に有意差が認められた($p < .01$)。さらに、表情構成部分は「その他」との関係に有意差が認められた($p < .01$)。したがって、幼児は感情(顔・喜)と大きさ(大)を主な要因として感情推測し、度合いカードの選択決定を行っていることが認められた。

第2に、幼児の表情図の感情(顔・喜)と大きさ(小)に対する感情推測した際の度合い得点理由比率における χ^2 検定の結果、有意差が認められた($\chi^2(3) = 80.88, p < .01$)。残差分析の結果(表3)、感情(顔・喜)は大

表3 喜び表情図(小)に対する幼児の度合い得点の選択理由(N=20)

度合い得点選択理由比較	F 値
感情(顔・喜)=大きさ(小)	5.46**
感情(顔・喜)=表情構成部分	3.93**
感情(顔・喜)>その他	7.28**
大きさ(小)>表情構成部分	1.64
大きさ(小)>その他	2.85
表情構成部分>その他	4.25**

** $p < .01$

表4 悲しみ表情図(大)に対する幼児の度合い得点の選択理由(N=20)

度合い得点選択理由比較	F 値
感情(顔・喜)>大きさ(大)	3.74**
感情(顔・喜)>表情構成部分	3.74**
感情(顔・喜)>その他	3.74**
大きさ(大)=表情構成部分	0.18
大きさ(大)=その他	0.18
表情構成部分>その他	0.18

** $p < .01$

きさ(小)と表情構成部分、「その他」との関係に有意差が認められた($p < .01$)。また、大きさ(小)は表情構成部分と「その他」との関係において有意差は認められなかった。さらに、表情構成部分は「その他」との関係に有意差が認められた($p < .01$)。したがって、幼児は感情(顔・喜)と表情構成部分を主要要因として感情推測し、度合いカードの選択決定を行っていることが認められた。

第3に、幼児の表情図の感情(顔・悲)と大きさ(大)に対する感情推測後の度合い得点理由比率における χ^2 検定の結果、有意差が認められた($\chi^2(3) = 30.00, p < .01$)。残差分析の結果(表4)、感情(顔・悲)は大きさ(大)と表情構成部分、「その他」との関係に有意差が認められた($p <$

.01)。また、大きさ(大)は表情構成部分と「その他」との関係において有意差は認められなかった。さらに、表情構成部分は「その他」との関係において有意差は認められなかった。したがって、幼児は感情(顔・悲)を主な要因として感情推測し、度合いカードの選択決定を行っていることが認められた。

第4に、幼児の表情図の感情(顔・悲)と大きさ(小)に対する感情推測後の度合い得点理由比率における χ^2 検定の結果、全ての関係において有意差は認められなかった。したがって、幼児は感情(顔・悲)と大きさ(大・小)、表情構成部分、「その他」の要因を平均的に用いて感情推測し、度合いカードの選択決定を行っていることが認められた。

2.5.2 大人が表情図を感情推測した際の強度に対する発話について

まず、大人の感情推測の強度における4群の度合い得点に関して平均と標準偏差を算出した(表5)。次に、質問紙調査で得られた自由記述{大人が表情図の感情(顔・喜悲)と大きさ(大・小)に対して感情推測した際の度合い得点理由}を{感情(顔・喜)}、{大きさ(大・小)}、{表情構成部分(目・眉毛・口)}、「無回答」、「その他」の5カテゴリーに分類した。また、「無回答」の度合い得点理由を除いた度合い得点理由の比率に χ^2 検定を行うことで度合い得点理由の比較をした。大人の表情図の感情(顔・喜)と大きさ(大)に対する感情推測後の度合い得点理由比率における χ^2 検定を行うことで度合い得点理由の比較をした。

第1に、大人の表情図の感情(顔・喜)と大きさ(大)に対する感情推測後の度合い得点理由比率における χ^2 検定の結果、大人の表情図の感情(顔・喜)と大きさ(大)における検定の結果、全ての関係において有意差

表5 表情図を大人が感情推測した際の度合い得点に関する平均(標準偏差)

群	大きさ大条件	大きさ小条件
喜び表情群	$n = 20$	$n = 20$
	4.40 (0.69)	4.0 (0.46)
悲しみ表情群	$n = 20$	$n = 20$
	4.25 (0.79)	3.85 (0.49)

表6 喜び表情図(小)に対する大人の度合い得点選択理由(N=20)

度合い得点選択理由比較	F 値
感情(顔・喜)=大きさ(小)	2.09
感情(顔・喜)=表情構成部分	1.27
感情(顔・喜)=その他	0.49
大きさ(小)=表情構成部分	0.67
大きさ(小)<その他	2.69**
表情構成部分=その他	1.89

** $p < .01$

は認められなかった。したがって、大人はそれぞれの要因を平均的に用いて感情推測し、度合いカードの選択決定を行っていると考えられる。

第2に、大人の表情図の感情(顔・喜)と大きさ(小)に対する感情推測後の度合い得点理由比率における χ^2 検定の結果、有意差が認められた($\chi^2(3) = 10.00, p < .05$)。残差分析の結果(表6)、感情(顔・喜)は大きさ(小)と表情構成部分、「その他」との関係において有意差は認められなかった。また、大きさ(小)は表情構成部分との関係において有意差が認められなかった。さらに、「その他」は大きさ(小)との関係に有意差が見られた($p < .01$)。これに加え、表情構成部分は「その他」との関係において有意差は見られなかった。したがって、大人は「その他」の要因を主にして感情推測し、度合いカードの選択決定を行っていることが認められた。

第3に、大人の表情図の感情(顔・悲)と大きさ(大)に対する感情推測後の度合い得点理由比率における χ^2 検定の結果、有意差が認められた($\chi^2(3) = 24.00, p < .01$)。残差分析の結果(表7)、感情(顔・悲)は大きさ(大)との関係において有意差が認められ($p < .01$)、表情構成部分と「その他」の理由との関係において有意差は認められなかった。大きさ(大)は表情構成部分と「その他」との関係に有意差が認められた($p < .01$)。さらに、表情構成部分は「その他」との関係において有意差は認められなかった。したがって、大人は感情(顔・悲)と表情構成部分、「その他」の要因を主にして感情推測し、度合いカードの選択決定を行っていることが認められた。

表7 悲しみ表情図(大)に対する大人の度合い得点選択理由(N=20)

度合い得点選択理由比較	F 値
感情(顔・喜) > 大きさ(大)	4.59**
感情(顔・喜) = 表情構成部分	0.11
感情(顔・喜) = その他	1.16
大きさ(大) < 表情構成部分	4.59**
大きさ(大) < その他	3.47**
表情構成部分 = その他	1.16

** $p < .01$

表8 悲しみ表情図(小)に対する大人の度合い得点選択理由(N=20)

度合い得点選択理由比較	F 値
感情(顔・喜) > 大きさ(小)	6.7**
感情(顔・喜) = 表情構成部分	5.06
感情(顔・喜) = その他	4.36
大きさ(小) = 表情構成部分	2.01
大きさ(小) < その他	2.80**
表情構成部分 > その他	0.67

** $p < .01$

第4に、大人の表情図の感情(顔・悲)と大きさ(小)に対する感情推測後の度合い得点理由比率における χ^2 検定の結果、有意差が認められた($\chi^2(3) = 70.00, p < .01$)。また、残差分析の結果(表8)、感情(顔・悲)は大きさ(小)と表情構成部分、「その他」との関係に有意差が認められた($p < .01$)。また、大きさ(小)は表情構成部分との関係に有意差は認められず、「その他」との関係において有意差が認められた($p < .01$)。さらに、表情構成部分は「その他」との関係において有意差は認められなかった。したがって、大人は感情(顔・悲)と「その他」の要因を主にして感情推測し、度合いカードの選択決定を行っていることが認められた。

3. まとめと今後の課題

本研究は、幼児と大人が大きさの異なる喜びと悲しみの表情図を感情推測した際の強度に対する発話ついて、度合いカードを使用して検討することを目的としている。

調査の結果、調査で得られた幼児の内省報告 {大きさが異なる表情図の感情(顔・喜悲)を幼児が感情推測した際の度合い得点理由} から、幼児が喜び表情図(大)に対して表情構成部分よりも大きい顔に影響を受けていると考えられる。また、喜び表情図(小)や悲しみ表情図(大)の場合、幼児は大きさよりも感情に影響を受けている。この点から、幼児の表情認知の要因には、positive感情と物理的な大きさがそれぞれ関係していることが示唆された。この結果は、戸田(2013)による幼児の表情図に対する感情推測強度において、大きさと感情ともに幼児に影響があるとの報告を発話の視点から質的にも支持するものである。

次に、大人の自由記述 {大きさが異なる表情図の感情(顔・喜悲)を大人が感情推測した際の度合い得点理由} から、大人が喜び表情図(大)と悲しみ表情図(大)の場合、大人は大きさよりも感情に影響を受けている。この点から、大人の表情認知の要因には、物理的な大きさはそれほど影響を及ぼさないことが示唆された。この結果は、戸田(2013)による大人の表情図に対する感情推測強度において、大人は感情ではなく大きさのみが影響を及ぼすという統計的結果を自由記述による質的側面から一部否定するものである。やはり、幼児と大人に与える刺激要因によって、その反応の理由には差異があると考えられる。また、幼児と大人に与える刺激要因が同一であっても、その表情認知には差異があることが示唆された。幼児と大人の表情認知の傾向性として、幼児は大人に比べて視点取得が未発達なため、物理的な大きさなどの単純刺激に強く影響を受けやすい傾向にあると考えられる。

従来、本研究のように幼児や大人を対象に、度合いカードを積極的に用いて表情図の大きさや感に対する感情推測強度の反応について、発話や自由記述から明らかにした研究はなされていない。現在においても、幼児の言語能力が未発達であるために評定法を用いることが困難である。本研究は、幼児の感情という認知的側面の測定に向け、度合いカードの必要性を示すことができただろう。また、阪本ほか(1969)による部分的な絵本研

究と同様、絵本作成における基礎的資料となるうえで社会的意義があると考えられる。今後の課題は、本研究で用いた度合いカードの有効性について、5歳児以外の相手の立場に立つことの困難な3歳や4歳の幼児の感情推測強度を測定する場合に適応しうるのか明らかにすることである。

引用文献

- 荒木紀幸, 1987, 『役割取得検査マニュアル』トーヨーフィジカル.
- 有馬比呂志, 1993, 「幼児の共感性に関する研究——4つの感情状況における共感反応」『広島文教女子大学紀要』第28号: 105-14.
- Eisenberg, N. and Miller, P, 1987, “The relation of empathy to prosocial and related behaviors.” *Psychological Bulletin*, 101, 91-119.
- 浜崎隆司, 1985, 「幼児の向社会的行動におよぼす共感性と他者存在の効果」『心理学研究』56(2): 103-6.
- , 1991, 「幼児・児童における向社会的行動の動機づけ要因としての共感性」『幼児教育研究年報』第13号: 25-34.
- 堀田一弘・栗田多喜夫・三島健稔, 1999, 「Log-Polar画像から抽出したスペクトル特徴を用いた対象の大きさ変化に影響を受けにくい認識法——顔検出と顔識別への応用」『電子情報通信学会技術研究報告』第99号: 69-76.
- 星野喜久三, 1969, 「表情の感情的意味理解に関する発達的研究」『教育心理学研究』17(2): 26-36.
- 今井靖親・桶本真也, 1973, 「幼児の共感性に関する実験的研究」『奈良教育大学紀要』22(1): 185-93.
- 伊藤美加, 2001, 「感情と情報処理方略」『京都大学大学院教育学研究科紀要』, 第47号: 380-91.
- 子安増生, 1995, 『発達心理学辞典』ミネルヴァ書房.
- 久保一郎, 1968, 「感情・情緒(情動)の表出とその一測定法の紹介」『愛知教育大学岡崎教育研究所研究紀要』第17号: 29-34.
- 樟本千里, 1999, 「視点取得能力と感情喚起が幼児の向社会的行動に及ぼす効果」『広島大学教育学部紀要』第48号: 193-201.
- McKelvie, S.J., 1973, “The meaningfulness and meaning of schematic face”, *Perception & Psychophysics*, 14, 343-48.
- 森下正康, 1990, 「幼児の共感性が援助行動のモデリングにおよぼす効果」『教育心理学研究』第38号: 174-81.

- 西元直美, 2001, 「幼児期における共感性の発達の検討」『関西福祉科学大学紀要』第5号: 155-68.
- 阪本一郎・藤井真澄・堤 淑子・荒井佳子, 1969, 「絵本と子ども」『読書科学』12(2): 23-9.
- 櫻庭京子・今泉 敏, 2001, 「2～4歳児における情動語の理解力と表情認知能力の発達的研究」『発達心理学研究』12(1): 36-45.
- 澤田忠幸, 1997, 「幼児期における他者の見かけの感情の理解の発達」『教育心理学研究』第45号: 416-25.
- 辰野千寿・高野清純・加藤隆勝・福沢周亮編, 1995, 『教育心理学辞典』教育出版.
- 戸田大樹, 2013, 「幼児の感情推測強度に表情図の色と大きさが及ぼす影響——保育における効果的な絵本教材の開発に向けた基礎作業として」『日米高齢者保健福祉学会誌』第5号: 125-34.
- 戸田須恵子, 2003, 「幼児の他者感情理解と向社会的行動との関係について」『北海道教育大学釧路校研究紀要』第35号: 95-105.
- 渡辺弥生・瀧口ちひろ, 1986, 「幼児の共感性と母親の共感性の関係」『教育心理学研究』第34号: 324-31.

付 記

本論文は、修士論文に一部加筆修正を加えたものである。調査に協力してくださった園の幼児たち、保育者の方々に心より御礼申し上げます。